

植田健夫さんへのインタビュー

場所：自宅マンション

日時：2021年9月4日

時間：13:00～16:00（2時間40分）

鈴木：それでは始めたいと思います。植田さんは、1975年生まれでよろしかったですか。

植田：はい。

鈴木：何月何日生まれですか。

植田：2月28日です。

鈴木：京都府の舞鶴市のご出身ですか。

植田：はい、そうです。

鈴木：3歳の頃、筋ジストロフィーのご診断を受けていますか。

植田：はい、そうです。

鈴木：これは、デュシェンヌ型でしたっけ。

植田：はい、そうです。

鈴木：お年は、46歳ですか。

植田：はい、そうです。

鈴木：植田さんは、ごきょうだいはいらっしゃいますか。

植田：姉がいます。

鈴木：お姉さまですね。で、お母さまが今、いらっしゃいますよね。

植田：はい、そうです。

鈴木：鼻マスクをつけられるようになったのは、いつ頃ですか。

植田：97年ですね。

鈴木：1997年。ということは、22歳。

植田：はい、そうです。

鈴木：宇多野に入る前ですね。

植田：はい、そうですね。

鈴木：子どものころって、お身体が動いていたような感じですか。

植田：小学校2年までは歩いていました。

鈴木：ご自宅でいらっしゃったわけですね。

植田：はいそうです。

鈴木：学校は、支援学校ですか。

植田：はい、そうです。支援学校です。

鈴木：それは、舞鶴市になりますか。

植田：それは、亀岡になります。

鈴木：亀岡に移られたのは、何年でしたっけ。

植田：僕が生後2カ月のときに。

鈴木：お母さまが植田さんの介助などのお世話をされていたか。

植田：父親と母親ですね。

鈴木：2000年に宇多野病院に入院することになったと思いますが、この経緯について教えていただけますでしょうか。

植田：経緯は、2000年の4月、父親が倒れて、病院に入院し始めて。

鈴木：2000年にお父様がたおられて、入院することをお決めになったというのは。

植田：父親が倒れてしまったから、仕方なく、宇多野病院に行ったということです。

鈴木：お母さまが決められたということですか。

植田：いや、決めたというより、母だけではちょっと、僕のことできないんで。

鈴木：いちおう、決めたのは、植田さんご自身ということですか。

植田：そういうことになりますね。

鈴木：宇多野病院に、入院した方がいい、ということは、どなたかから勧められたということですか。

植田：そういうことでなくて、母だけでは。母は足が不自由だったので、とりあえず、入院しようということで、はい。

鈴木：宇多野病院があるっていうことを紹介してくださった人はどなたですか。

植田：宇多野病院は、あの、小さい時に、3歳の時に、南丹市の病院で、ちょっと、おかしいんで、宇多野病院に見てくださいという感じで、診断を受けたら、デュシェンヌ型の筋ジスということになって。それで、病院に、自分は、紹介で行ったという感じがすかね。小学校2年のときに宇多野病院の筋ジス病棟に2か月ほど入院していて。

鈴木：そのあと、比較的関わりがあったということですか。

植田：そのあと、全然、なかったですね。

鈴木：主治医の方は別。

植田：主治医というより。宇多野病院に入ってなかったんで。

鈴木：でも、25歳のときに、入ることになったというのは、宇多野も知っているしということ、ご自身で決めたということ？

植田：そうですね。母と相談して。

鈴木：入院されたその日のことを覚えていますか。

植田：父親が倒れて、それで、隣の人が救急車で、父親と行ってくれはって。

鈴木：となりの人？

植田：となりの家の人。

鈴木：お父様が倒れて、となりの人が？

植田：救急車を呼んではって、一緒に行ってくれた。

鈴木：その日に宇多野に行くことになりましたか。

植田：そうですね。作業所に通っていて、職員の人、一緒に宇多野病院に行ったって感じですよ。

鈴木：作業所ってどこの作業所？

植田：亀岡作業所っていう。

鈴木：で、あの一、入院されて、生活がかなり変わったと思いますが、それはどんな感じでしたか。

植田：そうですね。病院なので、規則があって。

鈴木：入院したその日のことを覚えていますか。

植田：えっと一、病院について、夜ご飯食べて、それで寝た記憶しかありません。

鈴木：お母さまは何かおっしゃっていましたか。

植田：特に何も言っていないですね。

鈴木：これから、バラバラに生活することになるわけですよね。

植田：そうですね。

鈴木：それはどう思いましたか。

植田：父親が回復するかと思っていたんですが、4日後に父親がなくなったんですよね。それから、相談。ちょっと、話しを、母とか。あのとき、姉もいたと思うんで。そのときに話し合いをしました。

鈴木：話し合いをされて決められた？

植田：そうですね。

鈴木：25歳まで、ずっとご自宅で生活されて、病院で生活するっていうことはかなり違ったと？

植田：ぜんぜん違いますね。

鈴木：何が一番困りましたか。

植田：やっぱり、ご飯が時間が早いとか、消灯が9時とか、好き勝手できないというか、けっこう知らない人ばかりだし。ちょっと、不便でしたね。

鈴木：しばらく、生活されて、2010年頃に、JCILのアテンダントサービスを利用されますよね。これはどういうふうにして知ることになったんですか。

植田：他の患者さんの、お母さまから知ることになって、利用し始めたという感じです。

鈴木：他の患者さんが使っていたということですか。

植田：たぶん、はいそうです。

鈴木：他の患者さんのお母さまから教えていただいたということですか。

植田：はい、そうです。

鈴木：たぶん、その当初は、藤田さんも使っていたと思いますが、それは知っておりましたか。

植田：それは知らなかったです。

鈴木：では、別の患者さん経由なんですね。

植田：はい、そうです。

鈴木：このアテンダントサービスはお金を払う必要があった？

植田：そうですね。1時間半来てもらって、1000円払っていた感じです。

鈴木：どんなふうに使われていましたか。

植田：そうですね。身の回りをしてもらったりとか、髭剃りしてもらったり、という感じで。売店とかで、飲み物を買ってきてもらって、飲ましてもらったりとか。あとは、会話とかしたり。

鈴木：外に出かけることはありましたか。

植田：それはなかったです。

鈴木：それは考えましたか？

植田：でも、月に1回、宇多野病院の筋ジス病棟にいた看護師さんと一緒に、1ヶ月1回、外出を、していました。看護師さんは、今は、やめはった人で。慣れている人もいるからということでOKを出した。

鈴木：その看護師さんは、植田さんが親しく関わられる人だったんですかね。

植田：そうですね、はい、結構、長くいはった人ですから。

鈴木：そのときに、お母さまの付き添いがなくても大丈夫だったということなんですね。

植田：そうですね。

鈴木：それって、珍しいことなんですか？

植田：そうですね。患者さんによっては、1年に1回だけ、外出する人とかが、外泊する人とか。なかなか、外出することが、呼吸器している人は難しいみたい。呼吸器慣れた人じゃないと、外出することは駄目、みたいなあ。

鈴木：呼吸器をつけている人で、慣れた看護師さんが付き添えば、それは認めてくれたということですよ。

植田：はい、そうです。

鈴木：患者さんによっては、慣れた看護師さんと、仲良くなれない人もいると思いますが、そういう人は出られなかった？

植田：でも、ボランティアの人で、呼吸器に慣れている人がいはって、その人と出はることが多かったです。

鈴木：ということは、呼吸器をつけていても、ボランティアさんとか、慣れている看護師さんがいて、外出できていたかなあという感じですか。

植田：僕の場合には、月に1回できていたけど、他の人は分からないです。

鈴木：外出はどの辺まで出かけていましたか。

植田：京都市内を、出たくらい。

鈴木：何時間くらいですかね。

植田：だいたい4時間くらいですかね。

鈴木：外泊はないですよ。

植田：外泊は一回もなかったです。

鈴木：お母さまがいらっしゃれば、外出は可能ですよね。

植田：それはそうですね。

鈴木：外泊はどうですか。親御さんがいたら、実家に帰ることができますか。

植田：しようと思ったら、できたと思います。

鈴木：でも、それはしなかった。

植田：ま、そうですね。

鈴木：それはお母さまのお身体の状況ですか。

植田：なんか、帰る気がしなかったというか。

鈴木：外泊をしたいということはそのときは思わなかった？

植田：僕はそのときは思わなかったです。

鈴木：2010年にアテンダントをつかったときに、重度障害者の自立生活のことについて話を聞きましたか。

植田：そのときは聞いていない。

鈴木：自立生活センターについての説明はお聞きになりましたか。

植田：なかったです。

鈴木：その時点では、呼吸器をつけている人が地域で一人で暮らすという、かたちはご存じではなかったですか。

植田：いや。それは知っていました。

鈴木：それはいつごろですか。

植田：なんか、入院している人のなかで、筋ジスの兄弟の人が地域で暮らしているという話は、聞いていたんで。

鈴木：それは、宇多野の人ですか。

植田：たぶん、いた人ですね。地域に出て、ボランティアを募集して生活していた、という話は聞いていました。

鈴木：では、そういうことができるのかなあということは、ちょっとは思っていたということですか。

植田：それはなかったですね。

鈴木：そういう人もいるんだなあというぐらいですかね。

植田：まっ、そうですね。

鈴木：ということは、退院をしたいなあと思ったというのは、JCILの方々が訪問した後になりますか。

植田：もっと前ですね。2008年くらいから、規則が厳しくなってきて。

鈴木：たとえば、どんな規則が厳しくなったのですか。

植田：いままでの規則が、看護師の数が、減ってしまって。それで。自立支援法ができてからかなあ。

鈴木：病棟を移転されていますよね。

植田：そうですね。

鈴木：その関係ですか。

植田：そのときじゃないですね。2008年なんで。

鈴木：2008年くらいに、看護師の数が減って、規則が厳しくなった。具体的に、どんな規則が厳しくなりましたか。

植田：そうですね。お風呂が10分で終わるとか。食事中はテレビやラジオ、音楽とかを聞いたら駄目とか。

鈴木：2008年に規則が厳しくなって、そのときに思ったということですか。

植田：そうですね、はい。年を重ねるごとに、規則が厳しくなっていった感じですね。

鈴木：退院を思ったというのは、一人暮らしをしたいと思ったということですか。

植田：一人暮らしということは知らなかったの、とりあえず退院したいという気持ちがあつて。

鈴木：でもその方法を知らなかったということですね。

植田：そうですね。

鈴木：何かご自身で調べられたりしましたか。誰かに尋ねたりとか。

植田：していなかったです。

鈴木：病院の療育指導室の相談支援専門員さんがいらっしゃったと思いますけど、その方には相談されませんでしたか。

植田：いちおう、したと思うんですけど。病院を変えてみたりと、退院して、家に帰るとか、という話をしていました。

鈴木：でもその、重度訪問介護をつかって一人暮らしという話は一切なかった？

植田：そうですね。

鈴木：主治医の方にはお伝えされましたか。

植田：主治医には言っていないですね。

鈴木：言わなかった理由はありますか。

植田：特にないです。

鈴木：宇多野病院に入院されてからずっと同じ先生でしたか。

植田：4人変わりました。

鈴木：最初の2000年に入って、おひとり目の方はどのくらいですか。

植田：2年です。

鈴木：次の方は？

植田：5年です。

鈴木：7年たって、2007年ですが、次の方は？

植田：その人は、3年ですね。

鈴木：では、最後の方は8年ということになりますね。最後の方は比較的長かったんですね。2016年に宇多野で虐待事件があつて、あれは何があつたか植田さんをご存じですか。

植田：はい。

鈴木：どのようなことがあつたんですか。

植田：看護師はナースコールを離したりとか、押せないように。言葉の虐待とか。ベッドを

蹴ったりとか。

鈴木：複数の看護師さんですか。

植田：複数です。

鈴木：植田さんはそういうひどい目にあったことがありますか。

植田：ひどい目というか、そうですね、結構、僕って、はっきりものごとと言うようなタイプなので、そういうタイプでイラっとくる看護師さんがいて、パワハラみたいなことを言われていました。

鈴木：へえー。そのあと、移乗の制限があったという話があったということがあるんですが、植田さんもそういうことがありましたか。

植田：そうですね。なんか、週に1回とか、決まってきました。

鈴木：移乗は週に1回となった。

植田：はい、そうです。

鈴木：いままでは何回だったんですか。

植田：なかったときには、毎日とか、車椅子に座っていました。

鈴木：週に1回になったということは、移動は、週1回はできたということですか。

植田：最初の方はしていたんですけど、すごい、看護師さんがバタバタしていて、頼みにくいところがあって、言わなかったりとか。

鈴木：でも、その、それでも、移乗することは週1回でもできたということですか。

植田：最初はしていたんですけど、なんか、ストレスなんで、移らなくてもいいかという感じでした。

鈴木：最初の頃、外出もできたということですか、週に1回。

植田：外出は違います。

鈴木：外出はできましたか。

植田：外出は月に1回だけで。

鈴木：いちおう、月に1回はできたんですね。

植田：僕はできました。

鈴木：それは野瀬さんや藤田さんとは違いますね。

植田：はい。でも違います。2011年くらいから外出は月に1回するようになった。

鈴木：2011年から外出は月に1回されるようになって、2016年に虐待が起こって、起こったあとは、外出はできましたか？

植田：できました。月1回ですね。

鈴木：でも、移乗については、看護師さんのことを気にかけて、言いづらかったということですね。

植田：はい、そうです。

鈴木：そのあと、2017年の12月に大藪さん、岡山さん、小泉さん、段原さんが藤田さんのところに行っているんですけど、確か、藤田さんは植田さんと同室だったと思いますが、その様子についてはどんなふうに思われましたか。

植田：うーん。うーんと、藤田君は最初は状態が。病室の話ということですか。

鈴木：JCILの人が来ているという感じだったですか。

植田：最初のころは、藤田さんはJCILの人が来ていなかったと思います。

鈴木：でも、そのあと、岡山さんとか、来られますよね。

植田：それは覚えていなかった。

鈴木：なんか、来ているなあという感じでしたか。

植田：あー、来てはった気もする。

鈴木：植田さん、そのあと、2018年3月くらいに、重度訪問介護のヘルパーをつかえないかーということを療育指導室に言われたんですよね。

植田：そういうのがあるっていうことを聞いて、重度訪問介護があるということをおしえてもらって。

鈴木：どなたに教えてもらったんですか。

植田：療育指導室の方です。

鈴木：そのとき、あれですか、退院をするという、退院をして自立生活をするということをお考えになりましたか。

植田：はい。

鈴木：それは、療育指導室のその方と話しているときに、そのように思ったということですか。

植田：そうですね、はい。それで気になって、その日に電話をしたりとか、JCILに電話をして、2日後くらいに、小泉さん、岡山さん、高橋さんが来はった。

鈴木：あの一、退院について、一人暮らしをしようと決めたときに、藤田さんのところにJCILの人たちが訪問しているというのは関係していましたか。

植田：それは関係ない。

鈴木：療育指導室の方に、重度訪問介護の制度があるということを知って、それで一人で、ということになったということなんですね。

植田：はい、そうですね、はい。

鈴木：療育指導室のその方って、どうして、そういうのがあるっていうことを言ってくれたんですかね。

植田：野瀬君とか、藤田君が、先に、そういうのをやっていたから、だと思います。

鈴木：それで知ったんじゃないかという。

植田：僕は教えてもらうまで、分からなかったんです。

鈴木：でも、そのとき、野瀬さんも、藤田さんも、重度訪問介護ってつかっていなかったですよ。

植田：あっそうか。あー。

鈴木：でも、JCの人が来て、野瀬さんとか、藤田さんとかが、そういう気持ちになっているということで、おそらく、療育指導室のその方も、そんなことを考えてくれたのかなあという感じですかね。

植田：そうですね、はい。

鈴木：それは、自然に教えてくださったんですか、それとも、植田さんの方から尋ねて、そういう話になったんですか。

植田：いや、自然に。

鈴木：療育指導室の相談支援専門員の方と、けっこう、話をする機会があったんですか。

植田：そんな多くはないですが、たまに、話しとかしました。

鈴木：特別モニタリングの時期だから話したというわけではなくって？

植田：ではないですね。

鈴木：へえー。なるほどね。相談支援専門員の人は考えてくれるタイプの人だったんですか。

植田：その人は、そうだったと思いますね。

鈴木：退院のこととか、自立生活の方法とかを、知ろうとされていたということですかね。

植田：重度訪問介護ってというのがあっていう、重度訪問介護というものをどこかで調べたり、自立しているということを教えてくれて、それで退院したいという気持ちになった。

鈴木：植田さんにとって、退院して、一人暮らしを決めるときの、大きな理由というのは、療育指導室の相談支援専門員の人がその話をしてくれたということが大きかったですか。

植田：そうですね。

鈴木：ということは、JCIL の人が訪問して話をしたということよりも、相談支援専門員さんからその話を聞いたということが大きかったということですか。

植田：そうですね。

鈴木：そのあと、JCIL のスタッフの方が来られて、高橋さんが植田さんのことをよく訪問するようになりましたか。

植田：はい、そうです。

鈴木：週1回くらい来られていますか。

植田：週1~2回くらいだったと思います。

鈴木：週1回1時間くらい？

植田：週1~2回くらい。時間はちょっと忘れてしまったんですけど。

鈴木：ということは、退院するまで、少なくとも、週に1回は高橋さんが訪問されていたということですか。

植田：はい。

鈴木：それは、十分な時間だったと思いますか。

植田：そうですね。十分ですね。

鈴木：どんな話をされましたか。高橋さんと。

植田：自立生活をしていくという話を。

鈴木：やっぱり高橋さんと話をしていくなかで、一人で暮らすことはどういうことかが分かってきたという感じですか。

植田：そうですね。だいたい、イメージが出来てきたというか。

鈴木：当事者の岡山さんとか、大藪さんはこれなかったんですか。

植田：大藪さんはその頃は JCIL ではなかったんで、来てなかったです。

鈴木：当事者というよりも高橋さんが関わってきたということですか。

植田：岡山さんと、高橋さんですね。

鈴木：訪問回数は高橋さんが多かったですか。

植田：そうですね、はい。

鈴木：高橋さんって健常者じゃないですか。健常者の高橋さんが植田さんをサポートするっていうことについてはどう思われましたか。

植田：とくに違和感はなかったです。

植田：健常者の方でも基本的にはありではないかと思うということですか。

植田：そのときは、自立生活とか、よく知らなかったなので、違和感はなかったです。

鈴木：今から振り返って、どう思いますか。当事者の方がもっと関わったほうが良かったと思うか、それとも健常者でも大丈夫なのか。

植田：いや、岡山さんも、結構、来てくれはって、お話ししたりとか、家電見たりとか、そういうことはしていましたね。JCIL の本体に行ったりとか。体験室っていうところで、宿泊したりとか。していましたね。はい。

鈴木：高橋さんも関わったけど、当事者の人も植田さんに関わっていたかなあという。

植田：そうですね。同じくらい関わってくれて。

鈴木：役割って違うかと思いませんか。当事者の人の関わりと、健常者の人の関わりと。

植田：当事者の人だとできることはかぎられちゃうので、そこを高橋さんがサポートしてくれている感じです。

鈴木：できることが限られるというのは、具体的にはどうことですかね。

植田：移乗とかですかね。移乗とかは高橋さんが多かった。

鈴木：親御さんの説明は高橋さんですか。

植田：そうですね。なんか。それは岡山さんだった感じがします。お母さんが反対していたんですけど、そういうのがあるっていうのを聞いて、それで安心しはったみたいで。

鈴木：主治医や看護師長への自立生活センターの説明とかは高橋さんですか。

植田：していましたね。高橋さんと岡山さんの両方がしていましたね。主治医さんも看護師長さんもそういうことをしているということを知ってはって。すんなり OK はくれはったんですけど。

鈴木：主治医の先生と、看護師長は、自立生活センターについて、知っていたというのはどういうふうに？

植田：テレビとかを見て、少しは知ってはった感じです。

鈴木：テレビがあって、そういうことを知れるっていうことは大事なことだと思われませんか。

植田：看護師長さんはバリバラを通して知ったみたいです。主治医の先生はけっこう、理解がある人であって、自立生活とかを。ちょっと、マイク（拡声マイク）なしで。マイクがあると気がちってしまって、マイクなしでやってもいいですか。

鈴木：はい。

植田：なんか、反対とかはなく、僕がこうしたいとなったら、そうすればと。

鈴木：主治医の人はどうしてそこまで理解があったんですかね。

植田：他の先生とかは、退院については、責任問題とかをいって、なかなか OK 出せない、先生が多いですけど。

鈴木：でも、植田さんの主治医は責任問題を言っていない。

植田：ぜんぜん、言っていないです。なんか、逆に応援しますって言っていました。藤田君とか、野瀬君の場合には、主治医の方が難しい人で、なかなか出られなかった。

鈴木：ですよね。それは、考え方とか性格とかですか。

植田：そうですね。

鈴木：主治医さんによってかなり違うものですか。

植田：そうですね。退院して出て行っても、自己責任だと思ってて。なんで反対されるのかわかんないです。

鈴木：あー。

植田：病院のなかでは、なんかあったら、なんかあったらと、そういうことばかり言っていますね。

鈴木：でも植田さんの主治医はそういうことを一切言っていない？

植田：そうですね。なかったですね。

鈴木：それは鼻マスクと気管切開の違いということがありますか。

植田：多少はありますか。藤田君の場合には、吸引も頻繁にしはるんで、状態とかも、あったと思うんですけど。でも、僕の主治医が藤田さんとか、野瀬君とかの主治医だったら、反対はしていなかったと思うんですよ。

鈴木：そう思いますか。

植田：はい。

鈴木：当事者が関わることについてもういちどお聞きしたいのですが、健常者じゃなくて、当事者が関わることの意味についてどのように思いますか。

植田：JCIL は障害者がやっているところなので、岡山さんがそういうふうにするのは普通じゃないかなあとと思いますね。

鈴木：健常者じゃなくて、当事者の人がやってくれるということで安心感がありますか。

植田：安心感？そのへんはわかんないです。

鈴木：でも、やっぱり健常者じゃなくて、当事者も関わったほうがいいと思いますか。植田さんにとって。

植田：それが、なんか、それはいいことだと思います。

鈴木：どうしていいことだと思いますか。

植田：関わるのが、障害者ということなんで、健常者が全部やってしまったら、JCIL じゃなくなってしまうというか。

鈴木：家電を岡山さんと見に行かれていますよね。

植田：はい。

鈴木：あれは、岡山さんだから、良かったなあということがありますか。

植田：あ、そうですね。なんか、そうですね。ニトリとかも行ったんですが、女性なんで、そういうことが詳しいから、それは助かったというか。

鈴木：当事者の目線だからというのがありますか。

植田：そうですね。

鈴木：当事者の人にとって、よさそうなものを紹介してくれたりということですか。

植田：そうですね、はい。

鈴木：なんか、具体的に、こういうものとか、ありますか。

植田：ヨドバシで、家電コーナーでお鍋が売っていて、ニトリの方が安いから、ニトリに行きませんか、ということをはって。

鈴木：いろいろ詳しいというか。

植田：そうですね。

鈴木：逆に、高橋さん、健常者だからということで、相談できることってありましたか。

植田：高橋さんが来る回数が多いので、どうしても、高橋さんに言う回数が増えるというか。

鈴木：それはそれでよかったということですか。

植田：そうですね。

鈴木：2018年3月に退院するという話をしたときに、相談支援専門員の人とはどんなふうにおっしゃっていましたか。

植田：とくに何も言われなくて。

鈴木：主治医の人はなんか言うておりましたか。

植田：主治医の先生はなんも言っていません。

鈴木：やるんだったら応援するよって言うことは言ってないですか。

植田：応援という言葉は言っていませんけど、そういうふうな雰囲気。

鈴木：正式に伝えたのは、2018年の3月ですか。

植田：そうですね。

鈴木：そのときは特に何か言うわけではなく。

植田：最初は、僕が退院したいって言うことだけ、聞かはって、それで、あわてて来はって、それで、どういうことって、聞かはって、その重訪使うとか、JCIL という事業所があるとか、ということを説明したら、ちょっとわかりはったみたいで。それで、特に、僕は何も言われていません。

鈴木：重度訪問介護のことや JCIL のことについてわからないと。

植田：それを説明したら、わかってもらえたという。

鈴木：その場に、植田さんもいて、主治医もいて、相談支援専門員の人もいたということですね。

植田：はい。

鈴木：それで、わかりました、ということですか。

植田：はい。

鈴木：やってみませんかという感じですか。

植田：そうです。

鈴木：他の方については反対があったけど、植田さんの場合には。

植田：特に、反対はなかったです。

鈴木：そのあと、すぐに JCIL に連絡。

植田：そうですね、はい。なんか、小泉さんが来はった瞬間に、「帰ろう、帰ろう」、みたいな。退院しよう、退院しよう、って。

鈴木：ワッハッハッハ。そのとき、JCIL の皆さんがすぐに来てくれて、どう思いましたか。

植田：早っと思って。びっくりしました。

鈴木：でも、気持ち的には嬉しかった？

植田：そうですね。来てくれてもらった方が、安心というか。

鈴木：メッセージとかもそのころ連絡をとっていましたか。

植田：岡山さんとか、高橋さんが多かったですね。

鈴木：それは、事務的なやりとりですか。

植田：そうですね。

鈴木：いつ外出するとか。

植田：はい、そうです。

鈴木：それまでは使っていましたか。

植田：フェイスブックとかはあんまりしていないんで。増えましたね。それまではメールだけやっていて。ちょっとは使っていましたが、そこまでは使わなかったですね。

鈴木：病棟内は比較的自由に Wi-fi は使わせてもらった感じですか。

植田：はい、Wi-fi は。でも、時間が決まっています。

鈴木：何時から何時までだったですか。

植田：パソコンを使わせてもらう時間が決まっていて、10時からお昼ご飯まで。お昼は2時から夕ご飯まで。Wi-fi 自体は一日中使えるんですけど、食事の時間は。

鈴木：その時間帯にメッセージャーでやりとりをするということですか。

植田：はい、そうです。

鈴木：リアルタイムではないですね。

植田：リアルじゃないときも。

鈴木：ZOOMとかSkypeはやっていないですね。

植田：やっていないですね。そのときは。

鈴木：では、パソコンでやるときは、だいたいメッセージャーで、リアルタイムか、そうじゃないかで、やっていたということですね。

植田：はい、そうですね。

鈴木：セッティングは、どなたかにやってもらう必要があるんですか。

植田：そうですね。看護師に。

鈴木：それはいつでもセッティングはやってもらった感じですか。

植田：セッティングは、お昼とかだったら、2時とかに使えるので、それでセットしてもらって。それでやっていたという感じで。

鈴木：セッティングしたらあとは、植田さんは自分でできるような状況になりますか。

植田：そうですね。

鈴木：ということは、たくさん、支援が必要というわけではなくって。

植田：そうですね、はい。

鈴木：最初だけですかね。

植田：最初だけです。

鈴木：マウスを置いたりとか。

植田：はい。

鈴木：2018年3月に退院を決めた後に、お母さまにお伝えになりましたか。

植田：そうですね、はい。

鈴木：そのときに、なんとおっしゃっていましたか。

植田：最初は、反対していたんですけど、JCILの説明を聞いて、ちょっと安心しはったという感じですね。

鈴木：JCILの説明を聞いて？

植田：はい。

鈴木：お母さまは亀岡にいらっしゃいますか。

植田：はい、そうですね。

鈴木：あと、植田さん、2018年の6月にセルフプランを作られていますよね。

植田：たぶん、はい。

鈴木：計画を自分なりに書いたということですか？重度訪問介護の支給決定を受けるまで。

植田：ちょっと、そういうことが分からなかったので、任していた部分があるというか。

鈴木：それは、JCIL の人が手伝って、作ってくれたという感じですかね。

植田：いちおう、僕にも聞いて、それで作った感じですね。

鈴木：で、すぐに重度訪問介護が下りたという感じですかね。

植田：そうですね、はい。

鈴木：で、最初に外出されたのは、2018 年の 6 月ですよ。

植田：そうですね。

鈴木：最初に行かれたのはどちらですか。

植田：最初に行ったのはヨドバシだったと思います。

鈴木：うっふっふ。ということは、その頃から、退院に向けた外出というか。

植田：そうです。JCIL のヘルパーさんとか、他の事業所のヘルパーさんとかも来たりして。

鈴木：結構、いろいろなものを買いましたか。家具にしても、家電にしても。

植田：必要なものは全部そろえたという感じです。冷蔵庫とか、電子レンジとか、洗濯機とか、掃除機とか。

鈴木：結構、いろいろはところに行って、見て買ったということですかね。

植田：そうですね。

鈴木：やっぱり、実際に行って、見て買ったほうがいいかなあと思いますか。

植田：そうですね、はい。

鈴木：他の人は出られなくて、ネットで購入されていますけど、やっぱり見て買った方がいいと。

植田：見て買う方が、楽しいというか。やっぱり、行った方が、わかりやすいというか。

鈴木：こちらのこの、UR ですね。この物件以外にどこかお探しになりましたか。

植田：いちおう、北の方という話はしていたんですけど、松ノ木が入りやすいので、松ノ木  
でいいですっていうことになりました。

鈴木：北の方というのは？

植田：北区の方。

鈴木：北区にするのは何か理由があったのですか。

植田：やっぱり、静かなところというか、治安がいいというか。

鈴木：いちおう、探されたんですか。

植田：いちおう、探したんですけど、早く出たかったんで。松ノ木に行くということで。

鈴木：ここの物件はどなたが見つけてくれたんですか。

植田：ここは JCIL の利用者が住んでいるんで。ここに JCIL の利用者がたくさんいるとい  
うことで。

鈴木：植田さんとしては早く出たいということがあって。住みやすいということをお勧めされ  
たんですか。

植田：けっこう、部屋が広い方なんで。他のところを探すのが面倒くさいというか。

鈴木：で、ここを見られたわけですね。

植田：はい。

鈴木：で、見たときにどう思いましたか。

植田：まっ、OK みたいなあ感じで。

鈴木：自立生活体験室で介助者の体験もされていますよね。

植田：しています。

鈴木：7回宿泊されたんですか。

植田：たぶん、はい。

鈴木：1回宿泊するときは、1泊2日ですか。

植田：あー、2泊とか。

鈴木：2泊？

植田：はい。

鈴木：病院は2泊3日で大丈夫でしたか。

植田：病院は2泊3日でとくに何も言っていなかったです。

鈴木：最大何泊まで外泊できるんですか。

植田：それは知らないです。

鈴木：介助者の人にきてもらって、全員に会っている？

植田：ほぼ、全員じゃないですけど、ほとんど、介助予定の人は。

鈴木：事業所の人としては、JCIL とココペリさんと。

植田：それだけです。

鈴木：今でもそれだけですか。

植田：それだけです。

鈴木：で、介助者は15人くらいですか？

植田：だいたい。

鈴木：ほぼ、全員に会って、介助の全部を行ったような感じですか。

植田：研修をはい、しましたね。移乗研修とか、食事の研修とか。

鈴木：ちなみに、入浴は介助者がやるんですっけ。

植田：そのときは入っていなかったですね。

鈴木：訪問看護の響さんですかね

植田：たもつ（訪問看護リハビリステーション・たもつ）、という訪問看護

鈴木：その訪問看護の方もいらっしやって。

植田：いや、訪問看護の人とは話をしただけですね。

鈴木：では、介助者研修というのは、あくまでも、介助者だけ。

植田：そうです。

鈴木：ふーん、なるほどね。それは十分だったと思いますか。7回宿泊して。

植田：十分ではないですよ。もっとしたいという感じだったけど。

鈴木：もっとしたいという感じだった？

植田：はい。

鈴木：もうちょっとやったからのほうが、退院する上では安心だった。

植田：研修は一通り、したんで、大丈夫なんで、気持ちとしては、はよ一出たいという感じで。

鈴木：ワッハッハッハ。では、十分やったうえで、退院できたかなあという。

植田：そうです。

鈴木：藤田さんも野瀬さんもそれをやらずに退院されているんですけど、やっぱりやったほうが安心？

植田：絶対やったほうがいい。

鈴木：ですよね。あと、病棟内の研修はされていますか。

植田：移乗だけの研修をしました。

鈴木：病棟の看護師さんが介助者に対して

植田：はい。

鈴木：へえー。

植田：藤田君と野瀬君がそれができなかって。

鈴木：そうですよね。それも必要だったと思いますか。

植田：必要だったと思います。

鈴木：外泊の体験室って、病棟の看護師さんが来るわけじゃないですもんね。

植田：そうですね。

鈴木：両方あって安心できる？

植田：はい。

鈴木：看護師さんで理解のある看護師さんの話をされていて。鼻マスクをはずして鼻を吹くことについて。最初は反対だったけど、植田さんが話したら、理解してくれたという。

植田：理解というか、こっそりはずして、拭いてくださったので。

鈴木：ふーん。

植田：こっそりはずして、パッパッと吹いてくれた。

鈴木：それは病棟の中ではできないことになっているんですか。

植田：病棟では、そうしては、あかんみたいなあ感じで。そういうことを言っていたら、鼻を一生拭けないので。

鈴木：でも、説明した時に、その人は理解をしてくれたということですか。

植田：理解っていうか、理解。本当は駄目だけど、みたいな感じで。

鈴木：看護師さんのなかにも協力的な人はいましたか。

植田：けっこう、宇多野の、筋ジス病棟の看護師さん、気が優しい人が多いので、協力的だったと思います。

鈴木：退院の支援会議って何回か行われていると思いますが、十分だったと思いますか。カンファレンス。

植田：そうですね。主治医と、訪問看護と、JCIL と、良かったと思いますけど。

鈴木：回数的には十分だったと思いますか。

植田：十分ですね。

鈴木：あの一、お姉さまって、退院されることについて何か言っておりましたか。

植田：特に何も言っていません。

鈴木：反対もされていないですか。

植田：反対、というか、話しを全然していなかったです。

鈴木：退院してから、お姉さまとお会いすることはありますか。

植田：それはなかったです。

鈴木：お母さまは？

植田：お母さんは会いましたけど。

鈴木：ときどき来られるんですか。

植田：コロナ禍でなかなか来れないですけど、月に1回とか来ていましたね。

鈴木：へえー。ただ、最初は反対されていますよね、お母さんって。その後、士田さんと下林さんのお家を訪問されていますよね。

植田：あー。しました。

鈴木：そのときに、植田さんも一緒に行ったんですか。

植田：それは僕だけです。

鈴木：それは植田さんだけ？

植田：はい。

鈴木：お母さまは？

植田：そこは、松ノ木の見学だけ、来りました。

鈴木：そうなんですか。

植田：はい。ここの松ノ木の住んでいる人の見学を母がしました。

鈴木：どなたの？

植田：ここに入居されている人。

鈴木：ここの JCIL のメンバの人の家を訪問されているんですか。

植田：はい。

鈴木：そのときは、お母さまは何か話されていませんか。

植田：特に何も言っていないです。

鈴木：あとは、JCIL の本体の事務所に行って、金順喜さんと話をされたんですか。

植田：そうですね、はい。

鈴木：そのときは、植田さんはいらっしゃったんですか。

植田：そのときは、松ノ木は、ここの部屋をみにきただけで。松ノ木を見学にきて、そのときに、金さんと話をされていました。

鈴木：そのときに、金さんと本体事務所に行って話をした？

植田：いや、ここの部屋を見終わったあとに、この下（マンションの下）で話をしていましたね。

鈴木：では、金さんが案内をされていたんですかね。

植田：そうですね、はい。

鈴木：なるほどね。本当にいろいろな人が植田さんの支援に関わっていらっしゃいますね。

植田：はい、そうですね。

鈴木：なぜ、金さんがお母さんを、ここを案内されたんですかね。

植田：それはわかりません。

鈴木：土田さんと下林さんのお家を訪問したのは植田さんだけですかね。

植田：はい、そうです。

鈴木：そのときが、重度障害者が自立生活をしているのを見たのは初めてだったのですか。

植田：生活をしているのをみたのが初めてですね。

鈴木：どう思いましたか。

植田：そのときは、本当に、自立生活をぜんぜん知らなかったの、生活してはるんだなあという感じでしたね。

鈴木：イメージができた？

植田：それはできました。

鈴木：見る、ということは大事ですか。

植田：大事ですね。

鈴木：植田さん、重度訪問介護の支給決定は何時間おりているか、ご存じですか。

植田：時間数、どのくらいだったかなあ。

鈴木：720は超えていますか。1ヶ月。

植田：たぶん、それくらいだと思います。

鈴木：1日24時間は基本ですよ。

植田：はい

鈴木：ダブル介助の時間はありますか。

植田：はい。

鈴木：外出ですかね、ダブル介助って？

植田：外出のときが多いです。

鈴木：経済的基盤について聞いてもよろしいですか。

植田：年金と生活保護と。

鈴木：退院するにあたって、病院と対立するのではなく、対話していくことが大事だとお話されていたと思いますが、

植田：大事だと思います。

鈴木：それは、退院されたあとは、宇多野との関係はつづきますか。

植田：いやー、とくに。続いているわけじゃないですけど。

鈴木：わけではないけど、関係は大事にしたほうがいいのかという？

植田：なんというか、喧嘩別れみたいになったら、状態が悪くなったら、宇多野に行くしかないだろうと思うんですよね。そこで、ごたごたがあって、退院したら、入院は行きにくくなると思うし。そのほうがいいのかあと思って。

鈴木：うんうんうん。退院された日って、皆さん、見送ってくださいましたか。

植田：はい。

鈴木：どなたが、いらっしゃいましたか。

植田：いろいろな人が来はった感じですね。

鈴木：主治医の人は来ましたか。

植田：それは来ていません。看護師長さんと、生活指導員の方がきていましたね。

鈴木：相談支援専門員の方は？

植田：それは来ていました。

鈴木：それは、玄関まで来て？

植田：病棟の中で。

鈴木：それは、出るときに、十分に送っていただいた感じですか。

植田：十分だと思います。

鈴木：退院をして、こちらに来られて、最初の日ってどうでしたか。

植田：最初の日は、夕方くらいに来て、ここ入ってきて、ベッドが置いてあって。ネット環境がなかったんで、そのまま、話したりして、ご飯食べて、寝たという記憶しかないですね。

鈴木：よく眠られましたか。

植田：はい。

鈴木：とくに、心配な事があったということはない。

植田：なく。あと、なかなか、やっと退院できたなあという感じですね。

鈴木：やっと退院できたという。

植田：そうですね。

鈴木：解放感みたいな？

植田：あー、解放感。

鈴木：植田さんの場合は、外出もされているし、介助者研修もされていて、主治医も理解されて。それも大きいですか。

植田：あー、大きいですね。ただ、ちがった、退院して帰ってきたのはお昼過ぎだった気がする。そこで、入ってきたら、いっぱい人が集まっていて、最初、うえだりハビリの人がきていたりとか。最初は週2回通っていたので。うえだりハビリに行くことが決まっていて、その関係者とか、ごっちゃかえしていた。関係者がいっぱい集まっていて、めっちゃごちゃごちゃしていた感じですね。

鈴木：でも、介助なんかも、スムーズに次の日からいったかなあという感じですかね。

植田：はい。

鈴木：訪問医の先生は田中先生ですか。

植田：はい。

鈴木：病院の方が、安全で、地域は、ちょっと安全ではないと言われますが、植田さんはどう思いますか。

植田：病院にいたほうが、安全ですよ。だけど、出てきた方が。自由だからいいと思って。

鈴木：病院の方が安全だというのはどうしてそのように思いますか。

植田：まっ、緊急対応とか、病院にいるほうがちゃんとできると思うんで。

鈴木：地域の方が、緊急対応の面で、不安ですか。

植田：ちょっと不安ですね。

鈴木：体調が悪くなって、地域だったら、病院ほど対応ができないという不安があるということですか。

植田：そうですね。なんか、去年の10月に、腸が悪くなって、救急車に運ばれて、病院（第一赤）に行ったんですが、ヘルパーを入れさせてもらわなかった話で、高橋さんが

すごい話をしてくれて、ヘルパーを入れることができたんですけど。

鈴木：昨年の10月に、入院されたことがあるってということですか。

植田：はい。

鈴木：ヘルパーが入れなくて、そういうことがあるので、緊急の対応が難しいと？

植田：そういうことがあったりもするんで。

鈴木：主治医は24時間対応してくれているんですよね。

植田：はい。

鈴木：病院にいるときよりも素早くやってくれないということなんですか。

植田：まっ、そういうことです。

鈴木：やっぱり、時間のロスっていうか。

植田：はい。

鈴木：そうですか。

植田：主治医に電話をして、状態を言って、それで、話しをして、どうするかみたいなことで、ちょっと、状態が悪すぎるから、病院に行きましょうって言って、手配してもらった感じです。

鈴木：そのやりとりが、時間がかかるということですか。

植田：はい、そうです。

鈴木：病院の方が、その辺は早いということですか。

植田：まっそうですね。

鈴木：そうですか。でも、宇多野は土日は、主治医の先生はいらっしゃらないですよね。

植田：でも、当直の先生がいるから。

鈴木：そしたら、その当直の、植田さんの主治医ではないけど、なんかあったら、その先生に言って、対応もすぐしてくれるということですか。

植田：そうですね。

鈴木：ということは、医療面では、宇多野病院の方が地域よりも安心だと思う？

植田：そうですね。それに関しては。

鈴木：地域だとその辺は改善できるんですかね。

植田：それはなんか、病院はそういうことで、それは仕方ないことかなあと思う。

鈴木：変えようがないというか。

植田：そうですね、はい。

鈴木：なるほど。お母さんは食事のことを心配されていましたよね。やわらかい食事とか。でも、今は地域に出て、どうされていますか。

植田：きざみ食を食べています。

鈴木：お母さまが言われていたような、やわらかいものでなくても大丈夫？

植田：そうですね、はい。

鈴木：食事のときには、介助者にメニューを全部指示をしていますか。

植田：料理ができる人には、だいたいこのようなものを作ってという感じで。

鈴木：病院だと食事が出されるじゃないですか。

植田：はい、そうですね。

鈴木：地域だと、ある程度、言わなければいけないと思うんですけど、それは、苦ではなかったですか。

植田：料理が得意な人だったら、任せていたこともあるし、料理ができない人だったら、インターネットでレシピを出して、これ作ってくださいと。

鈴木：それはそれでいいかなあという感じですか。

植田：そうですね、はい。

鈴木：田中さんの料理対決バトルって提案されましたか。

植田：僕が提案したわけじゃないです。

鈴木：そうですね。どういう流れで、それを行うことになったんですか。

植田：田中君が自炊をすることがあって、1週間に1回、高橋さんと段原さんが、田中さんのところに行って、お昼ご飯を作っていたんですよ。そこに僕も参加しませんかと高橋さんが言ってきはって。知らぬ間に、そういう対決になってしまった。

鈴木：夜ご飯も含めて、植田さんにどうしたらいいのかということを知って来たということですか。

植田：そうじゃなくって、田中さんのところに高橋さんと段原さんが週に1回食事会みたいなことをしてはって、それに僕も参加しませんか、ということを知ってきはって。それで始まったという感じ。

鈴木：なるほど。段原さんと高橋さんがお昼ご飯に行っていたんですね。

植田：週に1回田中さんのところに行って食べるということ。

鈴木：なるほどね、それに植田さんも誘われて。植田さんも行ったんですか、田中さんの家に。

植田：行こうと思ったんですけど、コロナの関係で、ZOOM でやっていました。

鈴木：ZOOM で行うことを提案したのはどなたですか。

植田：高橋さん。

鈴木：あっ、高橋さん。うっふっふっふ。料理をつくって、対決するというのはどういうことなんですか。

植田：僕のうちでつくったやつを、向こうでつくったやつをこっちで食べて、こっちでつくったやつを、向こうで食べてもらった。

鈴木：家近いんですか。

植田：同じ団地なんで。

鈴木：あっそうですか、同じ団地なんですね。ちなみに、植田さんが田中さんのことをサポートされることってあるんですか。

植田：それはないです。

鈴木：話したりとか。

植田：そういうのは、野瀬君がやっていると思います。

鈴木：植田さんは、そういうピアサポート的なことをやっていますか。

植田：僕は、本体の活動はあんまりしていないんで。

鈴木：ご自身はやらなくていいかなあっていう。

植田：そうですね、はい。

鈴木：料理だけじゃなくって、掃除とか洗濯もご自身でやるような感じですよ。

植田：はい。

鈴木：それは介助者に指示をしてですか。

植田：指示をすることはありますけど、洗濯と掃除はだいたい決まっているので、指示を出さなくてもしています。

鈴木：なるほど。介助者にもやってもらう感じですね。

植田：はい。

鈴木：病院にいるときよりも退院した後の方が、支持をしなければならないことは増えた感じですか。

植田：あー、そうですね。

鈴木：それはどう思いますか。

植田：難しいですね。結構。

鈴木：それは何が難しいですか。

植田：ヘルパーさんによって、どうします、どうします、って聞いてくるから、答えるのがちょっと、面倒くさいなあと思うことがあったんですけど。

鈴木：植田さんとしては、いちいち聞いてくるんじゃなくて、やってもらいたいなあと思うことがあるということですか。

植田：なんというか、聞くのは大事だと思うんだけど、あまりにもめっちゃ聞いてくると、そういうことは分かっているんじゃないと、思って、そういうのは面倒くさいなあと思って。

鈴木：決まっていることについては、やってもらいたいと。

植田：指示を出すのは、それは、正しいと思うんですけど。

鈴木：事業所によって、考え方が違うということがありますか。JCIL とココペリさんとで。

植田：違いますね。

鈴木：どこが違いますか

植田：JCIL とかだったら、昔とかだったら、ほんま、障害者の人たちが指示をするまでは、やっちはあかんとか、昔はそういう、決まりがあったんですけど。障害者が何も言わなかったら、ヘルパーもなんもしなくて、障害者の人が指示を出すまで、動いてはあかんというのが、あって。今は違うんですけど。それがぬけきってないことがあるから。

鈴木：今は変わったという感じですか。

植田：基本は指示待ちなんですけど、それだけじゃ、ちょっと。難しいじゃないですか。

鈴木：ココペリさんだと、指示がなくても大丈夫という感じですか。

植田：基本は指示待ちなんですけど、やってくれることが多いですね。

鈴木：植田さんとしては、もうちょっとやってもらってもいいという感じがあるということですか。

植田：やることは決まっているんで、洗濯機を回すっていうのは、たとえば。そこをいちいち、指示出さなくても、わかると思うんです。

鈴木：なるほど。センターによっては、退院する前に、そういう指示の仕方とか、自立生活プログラムをやるところがあるんですけど。

植田：はい。

鈴木：JCIL はそこまでそれをやっていないと思うんですけど。

植田：はい。

鈴木：それは、どう思いますか。別にそれはそれでよかったと思うか。退院前に、介助者との関係とか、料理の仕方とか、掃除の仕方とか、ちゃんとやってから出たほうが良か

ったと思いますか。

植田：それは別になくても良かったと思います。

鈴木：今は、生活は自由ですか。

植田：ほぼ、はい。

鈴木：朝起きる時間とか、寝る時間とか、ご飯を食べる時間とか。

植田：はい。

鈴木：入浴って、週何回ですか。

植田：週2回です。

鈴木：それは訪問入浴業者に頼んでいる。

植田：はい。

鈴木：どうですか、入浴業者は？

植田：結構、なんか、結構、手順がいいというか、早く終わるとい  
るか。きちっとしてくれ

鈴木：それはよくやってくれているということですか。

植田：はい。

鈴木：介助の仕方もしっかり、洗ってくれたりしてくれるということですか。

植田：普通に洗ってくれます。

鈴木：特に不満もなく。

植田：特に不満もないです。

鈴木：植田さんが利用されているところは、藤田さんや野瀬さんと同じですか。

植田：いや、違います。

鈴木：違うんですね。

植田：違うところです。

鈴木：そこはどういうふうに使われましたか。

植田：高橋さんが、昔、ALS の人の介助に入っていたので、そこがなんか、今使っている、訪問入浴入っていて、高橋さんが、そこをお願いをしてくださった感じです。

鈴木：もっと週 2 回以上に入りたいという希望がありますか。

植田：週 2 回でいいですね。水曜日が、訪看さんとかに清拭をしてもらっているんです。

鈴木：訪問看護は週何回ですか。

植田：週 2 回です。水木と。

鈴木：リハビリは受けていますか？

植田：火曜日と金曜日に。

鈴木：それは病院のリハビリと比べてどうですか。

植田：病院だったら、すごい、なんか、リハビリする人の数が多いから。ゆっくりしてられないというか。病院だったら、10 分か 15 分で終わっちゃいますね。今来てくれるところは、40 分ゆっくりしてくれる感じ。

鈴木：へえー。何分くらい？

植田：40 分。

鈴木：ぜんぜん、違いますね。内容的にも違いますか。

植田：ぜんぜん違いますね。

鈴木：どう違いますか。

植田：病院は適当にやっている感じです。

鈴木：そうなんだ。地域は、植田さんの希望も聞いてくれるんですか。

植田：そうですね。

鈴木：介助はどうですか。病院って、ナースコールで待ち時間が長くはなかったですか。

植田：はい。

鈴木：最大でどのくらい待ちましたか。

植田：最大では30分とか、40分とか。

鈴木：今は待つことはないですか。

植田：ぜんぜんないです。

鈴木：その辺の安心感は違いますか。

植田：それは、はい。

鈴木：病院では、褥瘡とかで困ったことはありましたか。

植田：褥瘡はなかったです。

鈴木：地域で生活をしていて、介助者不足で悩むことがありますか。

植田：それはないですね。

鈴木：JCIL もココペリ さんも必要な介助者を確保してくれている？

植田：はい。

鈴木：そういう安心感があるということですか。

植田：はい。

鈴木：外出は何回くらいされていますか。退院された後。

植田：多くて、週 5 回。最近は、ちょっと、週 1～2 回ですね。

鈴木：病院に比べると、外出の回数が違いますね。

植田：ぜんぜん、違う。

鈴木：お身体とかには影響はないですか。

植田：特にないです。

鈴木：健康状態としては、病院と地域とでは違いがありますか。

植田：僕の場合には、そんなに変わらない。

鈴木：変わらない。お母さまは、1 ヶ月に 1 回来られて、生活の様子をみて、何かを言っていますか。

植田：特に言っていないです。

鈴木：退院してよかったとか言っていますか。

植田：あー、そういう話はしましたね、1 回。

鈴木：どんなことを話されていましたか。

植田：いやー、病院にいたときよりも全然いいやーって。

鈴木：ワッハッハッハ。どういうことがいいと？

植田：自由にのびのび生活していること。

鈴木：病院にいるときにも、1ヶ月に1回通われていたんですか。

植田：はい。

鈴木：じゃ、回数的にはそんなに変わらないないんですね。

植田：そうですね。

鈴木：来やすくなったんですかね。

植田：それは、一緒かなあ。

鈴木：お母さまとの関係性も今までとは変わらずに？

植田：はい。

鈴木：あと、最近、植田カフェを始めたじゃないですか。

植田：うっふっふ、はい。

鈴木：どういう経緯で始められたんですか。

植田：僕が、本体で、なんかできたら、みたいなことを考えてて、そのヘルパーさんとかと話をして、結構、カフェとかに行っていたんで、カフェしませんかみたいな感じで。

鈴木：伊藤さんから提案があつて。

植田：はい。

鈴木：左京区のお友達が？

植田：伊藤さんの方の。

鈴木：その方ってここに来られたんですか。

植田：ここに来て、入れ方を教えてもらいました。

鈴木：1回だけですか。

植田：はい。

鈴木：すでにカフェは2回やられているんですけど。

植田：いちおう。

鈴木：7月と8月。

植田：そうですね。

鈴木：今月は？

植田：はい。

鈴木：1ヶ月に1回くらいでやっているんですか。

植田：はい。

鈴木：今後の予定はどうされるんですか。

植田：外でやったほうがいいということは、他の人も言っはって。ちょっと考え中みたいなあ。

鈴木：植田さんの的には、そういうことがあってもいいかなあって。

植田：そうですね、はい。

鈴木：僕もこのあいだ、植田さんがコーヒーを作っているのを見させてもらって、すごいな

ぁと思いました。病院の暮らしと比べると違いますか。

植田：ぜんぜん違います。

鈴木：自分がやりたいことを JCIL の皆さんは動いてくれる感じですか。

植田：そうですね、はい。

鈴木：病院では、そういうことはなかったですか。

植田：いや、なかなかない。

鈴木：なんか、問題が起こったときに、支援会議を開いていますか。あるいは、何かをやりたいと思ったとき。

植田：特にやっていない。

鈴木：訪看の人とか関係者が集まって話しあうことはないですか。

植田：ないですね。ヘルパーが集まって、たまに、そういう話をするくらいで。

鈴木：植田さんの場合には生活が安定しているので、会議を開く必要もないんですかね。

植田：そういうのはあると思います。

鈴木：団地の中に自治会はありますか。

植田：それはないです。

鈴木：回覧板はこないですか

植田：こないですね。

鈴木：団地の人と話すことはないですか。

植田：ほとんどないですね。

鈴木：JCIL の人は団地に結構いるんですか。

植田：結構いますね。10 人くらい。

鈴木：えー、そんなにいるんですか。

植田：はい。

鈴木：その人たち同士で会うことがありますか。

植田：田中君と会うくらいですね。

鈴木：田中さんと会うことがあるんですか。

植田：はい、たまに。

鈴木：たまにですか？

植田：花火をしに行ったりとか。

鈴木：花火って最近ですか？

植田：最近です。野瀬君も来て。3 人で。

鈴木：へえー。どこでやるんですか。

植田：その鴨川で。

鈴木：へえー。そういう提案ってどこがされるんですか。

植田：田中君が利用している事業所の人で紹介でみたいな感じで。

鈴木：他に植田さんはやってらっしゃることはありますか。日中の活動として。

植田：月曜日に、毎週、JCIL の会議があつて、そこに参加している。毎週火曜日に本体に行

って。

鈴木：そのときには、何をされているんですか。

植田：ZOOMで話し合いとか。なんもないときには、懇談して話をしているだけです。

鈴木：で、1ヶ月に1回カフェをしている。

植田：はい。

鈴木：なるほどね。今から振り返って、病院の暮らしてどのように思いますか。

植田：入院したときは結構、看護師の数も多かったんですけど、2008年から結構厳しくて、規則が多いんで。

鈴木：2008年にどうして看護師の数が少なくなったんですかね。

植田：病院が国立ではなくなったら、責任とかが病院の責任になっちゃうんで。

鈴木：これから植田さんはどういうふうにしたいと考えておりますか。

植田：自立生活ですか。

鈴木：はい。

植田：普通の生活ができていることが重要なあつて、はい。

鈴木：筋ジスプロジェクトにも参加されていますよね。

植田：はい、まっ、聞いているだけです。

鈴木：他の方の支援もしたいと思うことがありますか。

植田：あー。そうですね、最近。南丹市の筋ジスの子の支援をすることになって。南丹市のところに、高校生がいて、その人の支援をJCが行うことになって。

鈴木：南丹市？

植田：支援学校の子なんですけど、それで僕が参加している感じ。

鈴木：そうなんですか。高校生の方は筋ジスの方なんですか。

植田：はい、ご自宅に。

鈴木：在宅の方なんですか。

植田：はい。

鈴木：これから、自立するとか、そういうことですか。

植田：学校の先生とかは、作業所に行くとか、施設に行くとか、そういうことしか言わなくて、自立生活ということがあるということを知ってほしいと。

鈴木：その話はどなたからきたんですか。

植田：僕が相談を受けて、それで、JCに頼んだということです。

鈴木：植田さんに直接相談が来たんですか。

植田：そうです。

鈴木：へえー。南丹市の人で。

植田：連絡をしてきたのは亀岡なんですけど。

鈴木：それで植田さんが聞いて、JCの人に話をして。

植田：はい、はい。

鈴木：それは、植田さんとしては、支援をしたいということなんですね。

植田：それは、したいですね。

鈴木：それは、ご自身の経験を生かせるからということですか。

植田：生かすとかじゃなくて。その、病院にいて、大変だったので、そういうところに行かなくても暮らせたらいいなあみたいなあ。

鈴木：具体的に、その人に定期的に会っていくような感じですか。

植田：かなあと思っていて。小泉さんも、その人のお母さんと知り合いみたいで。

鈴木：亀岡のその人のお母さんと小泉さんが知り合いなんですか。

植田：そう。

鈴木：うっふっふ。すごいつながりですね。

植田：そうそう、それが面白そう。

鈴木：亀岡のその人は植田さんとはどのような関係なんですか。

植田：関係というか、知り合いです。

鈴木：あっ、知り合いなんですね。そういうつながりの中で話がきて、なんかおもしろいですね。

植田：いや、小泉さんが亀岡に住んでいるんで。

鈴木：あ、そうなんですか。

植田：そうです。小泉さん、車運転しはるんで。

鈴木：あ、そうなんですか。でも遠くないですか。

植田：高速だったら、すぐですよ。

鈴木：そうですか。今はとくに、地域で生活していて困っていることは特にないですか。

植田：時間数が、少ないというか。2人介助が1週間で3回くらいが限界なんで。

鈴木：ということは、外出する時に、二人つくのが、週3回？

植田：限られています。

鈴木：あー。それをもうちょっと、外出するときの二人介助の回数を増やせないかということですね。

植田：そうですね。時間数を増やすためには、ちょっと、交渉しないといかんので。

鈴木：ということは、退院後の最初のときは、時間数は大丈夫だったけど、活動が増えて、時間数が必要になったということですか。

植田：そうですね、はい。

鈴木：そういうこともこれから交渉されていくということですか。

植田：たぶん、していくかもしれない。

(了)